



こんにちは!

気象庁です!

1月号
平成20年
(2008年)



全世界の海洋を監視するアルゴフロート

「アルゴフロート」とは、海中を自動で浮き沈みして、海面から深度2,000mまでの水温と塩分を観測する機器（図1）で、「中層フロート」とも呼びます。このアルゴフロートは、全世界の海洋の状態を常に監視することを目指して2000年より開始された国際プロジェクト「アルゴ計画」において、日本（気象庁および独立行政法人 海洋研究開発機構等）をはじめ米国、フランス等20以上の国と地域の協力により、全世界の海洋への投入が進められています。

2007年10月末には、「アルゴ計画」の目標であった運用台数3,000台に達し、全世界の海洋内部の水温と塩分の分布が常時わかるようになりました。これまで観測が少なかったインド洋や、荒天で観測が難しかった冬季の高緯度海域からもほぼ均一に海洋データが入手できるようになり、今や、全世界の海洋の変化を知るためになくてはならない観測システムとなっています（図2）。

このアルゴ計画で取得された全世界の海面水温・海流の観測データは、エルニーニョ現象の監視や予測、季節予報の精度向上に役立てられています。なお、海洋の状況は気象庁ホームページ内の「海洋の健康診断表」ページ（<http://www.data.kishou.go.jp/kaiyou/shindan/>）で見ることができます。

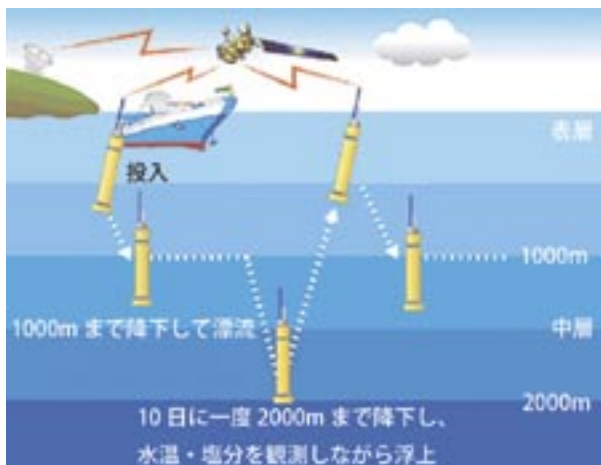


図1. アルゴフロートによる観測の模式図

海洋に投入されたアルゴフロートは深度1,000mまで降下して漂流し、10日に一度2,000mまで一旦降下したのち、水温・塩分を観測しながら海面まで浮上して、衛星を経由して自動的に観測データを通報します。

図2. アルゴフロートの分布状況（平成19年10月末現在）

我が国が運用しているフロート（紫色）は369台で、アメリカ（緑色）に次いで世界第2位の貢献をしています。





2月の気象

●●● 黄砂の到来 ●●●

日本への黄砂の飛来は、約9割が2月～5月の期間に集中しており（図1）、「春の風物詩」と言われています。黄砂の発生源はゴビ砂漠、タクラマカン砂漠などの砂漠地帯や黄土地帯です。この時期、これらの地域では雪解けの後に露出した地面が乾燥し、まだ十分に植物が生えていないため、黄砂の発生要因となる砂塵嵐が発生しやすいことに加え、大陸から日本へ吹く西風などの条件が重なると、黄砂の飛来が多くなります。

黄砂が飛来すると、洗濯物や自動車が汚れるなど日常生活に影響が出るだけではなく、見通しの悪化によって、航空機の離発着に支障がでることもあります。また、中国や韓国など黄砂の濃度が濃い地域では呼吸器系への影響など健康被害も報告されています。

気象庁では、目視による黄砂の観測を全国85か所で行っています。2007年の観測によれば、2月23日に最初の黄砂が観測され、4月1～3日と5月25～28日には日本の広い範囲で黄砂が観測されました。特に4月2日は、全国85か所のうち65か所で黄砂が観測され、1日の観測地点数としては1967年以来、最多となりました。

また地域別に見ると（図2）、黄砂は発生源に近い西日本や日本海側を中心に観測されることが多いことが分かります。

気象庁では、黄砂の観測とともに、黄砂の飛来予測も行っています。これらの情報は、気象庁ホームページ内の「黄砂情報」ページ（<http://www.jma.go.jp/jp/kosa/>）に掲載しており、随時最新の情報に更新しています。また、交通機関や日常生活に大きな影響を及ぼすような黄砂を観測したり予測した場合は、注意を呼びかけるために「黄砂に関する気象情報」を発表していますので、併せてご活用下さい。

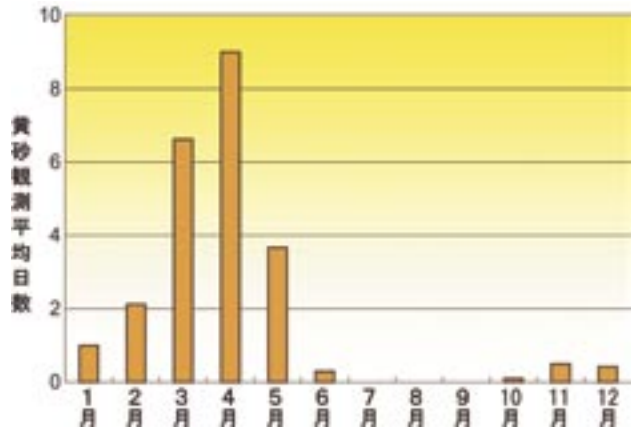


図1: 1967年～2006年の間で黄砂を観測した平均の日数を月別にまとめたグラフです。春季の観測が多いことがわかります。

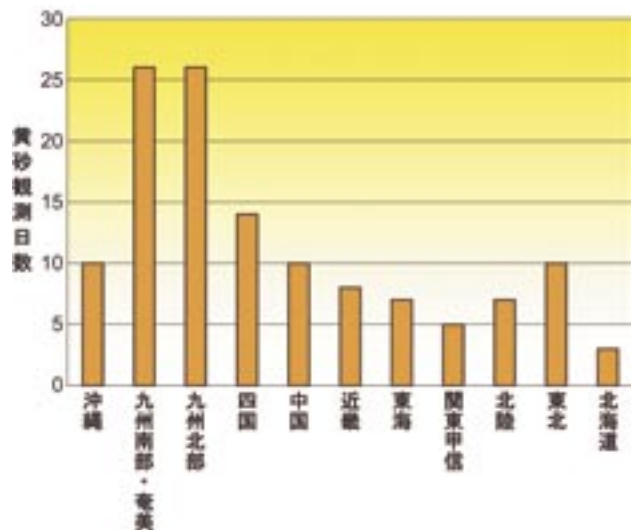


図2: 2007年（10月末まで）に黄砂を観測した日数を地域別にまとめたグラフです。西日本での観測が多いことがわかります。